

私の研究履歴 竹の子の皮をはぐやうに：若い日に 受けた導きの数々

田中，道雄

<https://doi.org/10.15017/4742025>

出版情報：雅俗．13，pp.104-108，2014-07．雅俗の会
バージョン：
権利関係：



竹の子の皮をはぐやうに — 若い日に受けた導きの数々

田中 道雄

◎プロフィール

●生年月日 一九三二年四月二五日

●卒論題目 切れ字の史的研究（佐賀大学文学部）

●デビュー論文 蝶夢の俳壇登場をめぐる諸問題（『語文研究』二一・二八・三〇・三三号）

●思い出の研究書（論文） 中村幸彦「西鶴の創作意識とその推移」エッセイ本文に記した『近世小説史の研究』で読んだ。人間洞察に裏打ちされた文学研究を知った。

●研究以外の趣味 格別なものはない。

「学問する」とはどのようなことか、私が識って行った道のりを振り返ってみたい。

私が業績と呼べるものを始めて発表したのは、昭和三十六年九月のことだ、新資料の宗因の連歌の翻刻とその解説である。すでに二十九歳。島津忠夫先生が祐徳神社の資料群の中に片々たる写本として在るのを見付け、私に与えてくださったのである。同座した連衆は佐賀藩士や僧侶たち。その一人一人をその時代の中に確認していく作業は、調査に手間をかけるほど史実を明らかにできる喜びを教えてくれ、それだけでも初学級の価値は十分にあったわけだが、先生は、それ以上の大きな体験を与えてくださった。

島津先生は、この写本資料に登場する佐賀の連歌作者たちが、俳諧の版本『時勢粧』にも出句することに気付かれたのである。この

孤本は当時まだ翻刻されておらず、先生は、わざわざ所蔵者の尾形仍氏のもとで披見してこられたのだった。先生は、それぞれの作者が連歌にも俳諧にも参加していることを指摘され、初期俳諧が連歌壇を母胎として現れることを示唆し、私にそのことを書くように勧められた。私は、あまりにも大きな問題であることに驚き、自分の任ではないとただちに辞退申しあげた。先生がまとめられた論文は、先生の著作集第三巻に第十四章として収められている。

私は、文字通り目から鱗が落ちる思いをした。中世の連歌が終わり近世の俳諧が始まる、といった教科書的認識を越え、生の資料がヴィヴィッドな歴史を教えてくれることを学んだ。それが面白かった。そして、学問するということは、既成の常識をこわし、より正しい見方を教えてくれる、これこそが学問

の真の意義であり、そこに学問する喜びもある、と識った。

この年の夏、中村幸彦先生の第一論文集である『近世小説史の研究』（桜楓社刊）の紹介を、『語文研究』十三号に書くよう編集部から求められた。この夏休みに私たちは、中村先生や島津先生に指導されて、太宰府天満宮の資料の整理に当たっていた。中村先生にお暇をいただき、まる一週間その執筆に専念した。一二編の論文を丁寧に見、ノートをとって行ったのだが、大変難渋した。一編一編が大きな岩山のように感じられ、それを必死により登った。

今も心に残る、そこで得た中村先生の学問の方法のイメージは、次のようなものだった。テーマに切り込むために、まず一つの問題点を見出す。その問題点を得ると、それを解明するために推論に従って多くの資料を整え、その資料を駆使して論を立てて解答を得る。さらに次の問題点を見出して、推論して資料を整え、それを論証する。そのような複数の問題点の解決があつて、さらに上位の問題点が生み出されてくる。これがまた次の問題

点に派生していつて、推論・資料の取りそろえ・論証という手順を繰り返す操作の末に、ようやく一編の論文の結論が導き出される。そのような重厚な論文が一二編、仮名草子から人情本まで近世小説のほとんどの様式を取り上げているので、全体で近世小説史を構成することになる。私はそこに、運動会で人が築くピラミッドのような美しさを見た。

一週間の体験のイメージは、右のようなものとして記憶に在る。そして、紙である一冊の論文集が、まるで鉄筋コンクリートの構造物のように感じられた。大地に基礎をもち、ハンマーで叩いても決して崩れないような論文には簡単には壊れない強度が求められる、と識った。

中村先生は実に多くのことをお教へくださったが、今とくに、次の二つのお言葉を思い出す。一つは、昭和三十四年七月、天理図書館に向く前に、先生にご挨拶にうかがった際だった。修士論文の資料を得るため、二週間ほどの長期調査に出かけたのである。先生は、「綿屋の本を皆見て来い」とこともなげに言われた。勿論、全国随一の俳書コレク

ション・綿屋文庫の閲読を、わずか二週間で果たせるはずはない。しかし、その後も永く学問に携わってきたのは、せめて安永天明期の俳書だけでも皆見よう、と思いついていた故であろう。そのことを、今ようやく覚るのである。

もう一つは、講義の中での、「君たちは估屈な論文を書け」というお言葉である。どうか、誤解しないでいただきたい。鬼面人を驚かすような難解な論文を、というのでは決してない。中村先生は、好んで人の上に出ようとする人間の対極に在った。未知の在野の研究者の質問にも、丁寧にお返事を認めておられた。ともあれ私は、右のご著書紹介の仕事で、その「估屈」の意味するところをじっくり体感し得たのだった。〈推論↓資料の取りそろえ↓論証〉の何段階にもわたる積み重ね、これを一つ一つ理解しながら読み進むにはかなりの集中力を要する。長時間にわたり緊張を維持するのは相当しんどい。まさに先生のご論文は、「估屈」以外の何ものでもなかった。論理性に富んだ粘りある強靱な思考力・構想力——これこそが先生の「估屈」の正体なのである。

右の新刊紹介の執筆体験は、私に中村先生の学問の質を、かなり理解させた。限りなく多くの資料に接すること、幾重にも幾重にも疑問を重ね、論証を重ねること、と。

ここで、一回だけ先生が添削してくださいった拙文のことを思い出す。最初に提出したレポートだったか、赤インクの大きな斜線が各所に加えられ、文章量が三分の二か半分ほどに減らされていた。確かさを欠く甘い部分、論旨展開に必要でない部分、感想のような部分、つまり贅肉部分が次から次に小気味よいように削ぎ落とされたのである。無駄な部分が介在すれば、一筋の論旨を貫く鋭さが失われる。あの赤インクは、常に明晰さを目指せ、とのお諭しだったのだろう。

右の新刊紹介の中で、私が驚いて書き記していることが、いま一つある。それは、思考力の強靱つまり〈強さ〉とともに、それに並ぶ別の側面として、〈柔らかさ〉を持ち合わせよ、という教訓であった。例えば次のように先生は述べられる。

この文学（近世俗文学）を理解する為には、文学性を真正面の目的としてのぞむ

前に、竹の子の皮をはぐやうに、時代的な皮を、一枚づつ大事にかけてはいでゆかねばならぬ。（二一ページ。著述集第五卷一

五ページ）

文学性を論ずる前に、大小の事象の一つ一つを丁寧に解決しつつ進んで行けとの教えだが、私の心には、「竹の子の皮をはぐやうに」「一枚づつ大事にかけて」という比喩の部分がことに印象深く刻み込まれた。用心深くあれ、柔軟であれ、とも読めるからである。

先に先生の学問の方法のイメージの中で「問題点を見出す」といったのは、言い換えれば「切り口となる観点を見付ける」ということになる。これこそ、作品その他もろもろの対象を、先入主抜きで虚心に受け入れる中でしか得られないだろう。それに、資料を読み、事象に接する際には、研ぎ澄まされた感性と繊細な精神とが常に求められる。

先生の論文集を読んでいると、いたるところで、この注意深さ、目配りの細やかさに出会う。切り口の発見の場合にとどまるものではない。一定のまとまりある何かが分かて行く過程には、小さな気付きを無数に伴うのだろう。「柔らかさ」においても、粘り強い積

み重ねが大切なのだ。

この「柔らかさ」ということは、もう一組の相対する研究態度にもかかわってくる。それは、巨視と微視という対語で説明できる。文学史にも及ぶような大胆なとらえ方と、小さな誤記から作者の意識を読みとるような細心緻密なとらえ方とを、常に二つともに備えておく、ということである。

先生からは、方法は対象に応じて編み出すべき、ということも学んだ。しかし今、中村先生の学問のすべてを語ることはできないし、私にその力があるかも疑わしい。ここでは、ご論文集の紹介の中で学び得た、その柱の部分述べたに過ぎない。ともあれ先生の『近世小説史の研究』が、私にとって学問するうえでの特別な一冊であることは間違いない。

中村先生のお教えとして、いま一つ欠かせぬことがある。それは学問をする者が備えるべき、心の在り方を示されたことである。先生は、「毅然とせよ」というお言葉をしばしば口にされた。「綿屋の本を皆見て来い」というのもまさにその精神であろう。気迫をもって

臨むのであれば、大切なことは分かってこない、それが著述集十五巻を残された先生のご体験から生まれた信念であった。あれほど慎重を期する先生が、「論を立てるときは大胆であれ」とも言われた。真に学問を愛するなら、新しいものを生まねばならぬ、それにはそれ相応の覚悟が要るのだ、そう先生はおっしゃりたかったのだろう。

先生の慎重さは、先生の謙虚さにつながっていたと思う。その謙虚さは、柔らかな物腰によく現れていたお人柄にもよるが、人並みすぐれて多くを究められていた故であろう。まだ究め得ていない部分の大きさを、誰よりもご存じだったはずだから。

中村先生の学問は、作品や作者の問題にとどまらずに、時代の思想状況や作品の伝達になう書肆の問題など、文学の成立にかかわってくる事象のすべてに目を配れ、というお立場だった。複数の歴史的事象の複合的な絡み合いに注意せよ、ということである。これをお考えを、私は大変容易に理解した。それは、高校時代の世界史で、そのような方法は

そ歴史研究の本道である、と学んでいたからである。終戦の時、私は旧制中学の一年生だった。途中で新制に変わり、高校二年の時に世界史の授業を受けた。昭和二十四年頃に初めて設けられた新しい教科である。皇国史観に基づく国史を学び、東洋史・西洋史という語しか知らぬ生徒たちにとって、世界を一つのものとして歴史を考えるとという思想は、大変新鮮なものだった。

私は石田明先生に教わったのだが、先生は、歴史を静的な史実の羅列としてでなく、さまざまな要因が複雑に絡み合いながら一つの時代を創りだしていく、まさに生きている動的な姿として理解させようとされた。この春、京大の西洋史学科を出たばかりの先生は、熱っぽく語り、教室外でもいろいろとお教えくださり、書物もお借りした。先生は大塚久雄の著作を奨められた。こうした中で、歴史の在るべき姿と歴史を学ぶことの面白さを識ったのである。

中村先生の学問の基本的方法を知るには、著述集第二巻の「前言」と第三巻の「近世文学史の構想」が簡便である。この内容は、近

世文学史の講義の一回目に話されたもので、私はいつもここに帰って考えることにしている。先生はこれの中で、文学生活の中核をなす要素として、作品・作家・鑑賞者・伝播者の四つを挙げ、創作・鑑賞・伝播という三つの人間活動を示している。これらを念頭に置くことは、研究を進めて行くうえで不可欠な条件である。

この中核となるべき要素その他について、より多面的な知識を与えてくれたのは、長谷川泉著の『近代文学研究法』（一九六六年、明治書院刊。一九七三年五版）であった。四十歳の頃、今井源衛先生が雑談の中でお奨めくださったのである。

学部でお教えを受けた大谷篤蔵先生は、昭和三十三年春に大学院に進んでからは、学問の在り方について論されることは一度もなかった。ただ、入学の前にご挨拶にうかがった際に、餞とされたのだろう、たった一言おっしゃった。

田中、すぐに書いてはいけないぞ。（上方弁だったか）
とだけ。

私はそのお教えを守ろうと努めてきたが、年を経るごとに、そのお言葉の意味するところ、その重みをしみじみと感じる。

先生に、「蕉風連句における「人間」」（俳林間歩）収」というご論文がある。その内容は講義でも承っていたが、芭蕉の連句論としては勿論、芭蕉論としても最高水準の論文と思う。これからの芭蕉研究にとどまらず、近世文学研究全般に大きな示唆を与え得る力を秘めている。ご発表は昭和二十八年五月だが、シベリア抑留から復員されたのは二十三年七月だった。芭蕉の全生涯の連句を論じたこの論文が、復員後の五年間だけで成ったとはどうしても思えない。

先輩から、先生は背囊に岩波文庫の万葉集と芭蕉七部集を入れて出征されたそうだと聞いたことがある。軍務での寸暇に、先生は芭蕉を読み、芭蕉を考えておられたに違いない。熟成された思考のもつ強み、この論文の滋味は読む者を納得させずにはいない。先生が日々の生活の中で身につけて行かれた人間観、それを抜きにしてこの論文はないだろう。軍務の合間にも先生は考え続けておられたのだ。先生のお宅にお邪魔した際に、「お父

ちゃんはいつお勉強してんの」との幼いお嬢さんの無邪気な問いに、先生が（朝起きてから夜寝るまでずっと勉強している）というようなお答えをなさったことがあった。いつも考え続けている、との意であつたらう。

先生は、抑留時代については黙して語られなかった。たった二回、北朝鮮で終戦を迎えたこと、それとシベリアで耳にしたロシア人のコーラスの美しさを話されただけである。壁塗りか何かの作業をしていた彼らが、誰ともなく歌い出して、見事なハーモニーを成したのだという。女性兵士の群とお聞きしたかも知れない。天山山脈の北にあるアルマタという酷寒の街で、収容所の生活でたまさか得られた短い余暇に、丸刈のお頭で将校服を召された先生は、七部集を読み蕉風連句のことを考えておられた。私には、そのように思えてならない。

読みつづけ、考え続けること――。

私の学問を培ってきたお教えの数々を、思い出すままに記してみた。若い方々のお役に立てばと書き始めたが、どうやら私の戴恩記になっていたようである。